

平成七年三月四日(土)

午後一時始(開場十二時三〇分)

於豊橋市文化会館ホール

電話(〇五三二)六一一五一一

華道家元池坊豊橋支部五十周年記念

# 立花 供養

立花 立調

財団法人池坊華道会

池坊中央研修学院 教授  
池坊華道会 教学委員

神内曙光

助手 山下幸男

# 能 組

能

半

シテ

今泉英三

節

ワキ

竹内省吾

大鼓

河村総一郎

小鼓

福井啓次郎

笛

鹿取希世

立花

間

畑中良雄

後見

粟谷明生

粟谷浩之

地謡

鈴木崇史

水谷清

森田収

仝

永田六兵衛

竹内三郎

太田康弘

清水利高

中嶋康夫

# 立花供養・半部 あらすじ

小書「立花供養」

本物の花仕立てで季節の花々を盛った立花は正先に出され演技も常より重々しくなります。とくにワキ方にとっては大切な習いものであります。

『源氏物語』夕顔の巻に扱った曲で、昔は「半部夕顔」とも言いました。作者は内藤左衛門とされています。

都・紫野雲林院の僧（ワキ）が夏の修行も終り近くなったので、その期間に仏に供えた花々の供養をしていると白い花が開いたように、どこからともなく一人の女（前シテ）が現れて、花を捧げるので、その名をきくと、ただ夕顔の花と答えて、その名を明かしません。更に問いつめると、五条あたりの者とだけ言って、活けられた花の陰に消え失せます。〈中入〉不思議に思った僧は、五条の人（アイ）に光源氏と夕顔の物語を聞き、その跡を吊うため五条あたりを訪ねます。すると、荒れ果てた一軒の家があり、夕顔の花が咲いていたので、『源氏物語』の昔を偲んでいると、半部を押し上げて、一人の女（後シテ）が現れます。僧は、花と見まごう女の美しさに、ありし日の夕顔の女を偲び、思わず落涙します。女は、源氏が夕顔の花の縁で歌をとりかわし、契りを結んだ楽しい恋の思い出を語り、舞をまいますが、夜明けの鐘が鳴ると僧に別れを告げ、また半部の内にもどってゆきます。

シテは夕顔の花の精とも、夕顔の女の霊ともとれ、花と女との二重映しともいうべく、茫漠としたうちに「夕顔の巻」の面影を浮かび上がらせ、短い生涯のうち光源氏と契った、はかない恋のよろこびを回想するという夢幻的な作品です。

（三時五〇分終了予定）

主 催 華道家元池坊豊橋支部

支部長 吉 田 幸 子